

村井邦彦 私の履歴書（24）YMO

作曲家

2023/2/25 2:00 | 日本経済新聞 電子版

アルファの提携相手、A&Mレコードの本社はロサンゼルスの特徴ともいえるサンセット通りとラブレア通りの交差点付近にある。チャップリンが「独裁者」などを撮った映画スタジオをそのまま残した歴史的な建物だ。

奥には数々の名盤が録音されたスタジオがあり、その右側にある事務所の主はルー・アドラーだったが、1978年秋にはトミー・リピューマに代わっていた。ワーナーでジョージ・ベンソンら多くのジャズ系のヒット作を生んだ名プロデューサーだ。

トミーはA&Mに移ってニール・ラーセンらのフュージョン音楽を手がけていた。アルファレコードもフュージョン系の音楽を出している。

それで78年12月、ラーセンとアルファの音楽家が競演する「フュージョンフェスティバル78」を新宿の紀伊国屋ホールで開くことになった。



（左から）高橋、細野、筆者、坂本（1980年12月、日本武道館の楽屋）

アルファの出演者は渡辺香津美、大村憲司、吉田美奈子、深町純といった面々だ。僕はデビュー間もないYMO（細野晴臣、坂本龍一、高橋幸宏）も加えることにした。

来日してYMOを生で聴いたトミーは感激して「クニ、僕にやらせてくれ。この音を世界に広めよう」と言った。

YMOのシンパになっていたA&Mの若手たちは大喜びで、頼みもしないのに米国盤ジャケットのイラストをルー・ビーチに発注した。髪の毛が電線になった着物姿の女性を描いた「電線芸者」だ。

トミーを訪ねてきた「チューブス」というバンドのマネージャーがYMOをゲストで招きたいと持ちかけた。

その話は79年8月に実現する。ロススのグリークシアターにYMOが登場すると米国の観客は熱狂した。最新のシンセサイザーを操り、そろいの服を着て黙々と演奏する姿は「ハイテク先進国」「東洋の神秘」のイメージと相まって強烈な印象を与えたようだ。

現場を任せた象（しょう）ちゃんこと川添象郎（しょうろう）が会場の音響や照明スタッフに「前座扱いではなく、チューブスと同等の完璧なステージにしてくれ」と根回しをしたのも大きかった。「トークは不要。演奏に徹すればいい」とYMOを送り出したのも象ちゃんだ。

このステージの映像はNHKニュースで取り上げられ、いきなり全国でレコードが売れ始めた。

米国ではA&Mの若手シンパの働きかけが功を奏してフロリダ州のラジオとディスコで火がつき、やがて全米に広がった。同じように欧州のラジオでも人気が発見した。

パリ公演は現地ラジオ局が生中継し、司会が細野にフランス語で質問した。通訳はいない。細野はやけくそになって「てんぷらそばが食べたい」と日本語で答えた。ニューヨークのテレビでは、僕が「西洋の技術で日本の心を表現している」とYMOの音楽を説明した。和魂洋才である。

印象深いのはロンドンのハマスミス・オデオン公演だ。英国を代表する大会場が満員になり、本当にYMOは成功したのだなと実感した。

YMOの成功の陰には幸宏のファッションセンスもあった。トレードマークになった赤い服は彼のアイデアだ。古い日本の制服図鑑に載っていたスキー服を参考にしたそうだ。いい男だった。はにかんだ笑顔が今も目に浮かぶ。

YMOのレコードの印税計算書が分厚い束で送られてきた。英、仏、西独など欧州の主要マーケットのほか、イタリア、スペイン、北欧諸国、さらにインドや南米からの印税もある。世界をマーケットに成功するとはこういうことなのかと初めて実感した。

